

はじめての歎異抄講座

1.本章の内容

死をどうとらえ、死者とどう向き合うかが、宗教の重要な要素である一方、それが主体となっている日本仏教は世界でも他に例をみない「葬式仏教」といわれます。仏教はインドの生死観を反映していて本来祖先崇拜を唱えませんが、中国の生死観を反映した儒教の影響を受け、祖先崇拜や先祖供養の教えとして日本に広がりました。法然聖人以前の念仏は、そうした先祖供養の念仏として広まっていたという歴史的背景を押さえつつ、法然聖人の本願念仏の教えが、鎮魂や慰霊と別次元の釈迦仏教、つまり仏教本来の姿へ大きく転換していく教えであったことを示した章です。

2.忌中と喪中とは

ご縁の方の死を一定期間悼み、身を慎むことを忌服^{きふく}あるいは服喪^{ふくも}と言います。これは門戸を閉じ、酒肉を断ち、弔^{ちやう}せず、賀^がせず、音曲をなさず、嫁とりをせず、財を分かつとという慎みの文化、作法として現在も残っています。忌中と喪中の作法では正月飾り^{しめなわ かどまつ}(注連縄、門松など)、鏡餅等の飾り付けや正月料理、お屠蘇^{とそ}、年始まわりや神社への初詣も慎むべきとされ、儒教の影響を受けたものです。

忌中の喪中の期間は太政官布告^{たじやうかんぷこく}(明治7年発布、右表参照)に定められたものが一般的で、忌は自宅謹慎の期間、服は喪服を着用する期間にあたります。現在こうした法令はすべて撤廃(昭和22年)されていますので、四十九日法要までが忌中、一周忌までが喪中として、また年賀欠礼などの作法に簡略化されて残っています。

死は忌むもので、遺族は身を慎まなければならなかったケガレの思想は古来から伝わるもので、そこに神道や、追善供養を説く儒教の影響が加わっ

続柄	忌日数	服(喪)日数
父母	50日	13ヶ月
養父母	30日	150日
夫	50日	13ヶ月
妻	20日	90日
嫡子(息子)	20日	90日
その他の子(娘)	10日	90日
養子	10日	30日
兄弟姉妹	20日	90日
祖父母(父方)	30日	150日
祖父母(母方)	30日	90日
おじ・おば	20日	90日
夫の父母	30日	150日
妻の父母	なし	なし
曾祖父母	20日	90日

て、さらに死者供養を説かなかった仏教もいわば追認する形で加わったことで、現代日本人の生死観は習俗と宗教、様々な要素が複合した思想の上に成り立っています。

⇒お焼香の回数や作法の違い、お焼香の意味の違いなど宗派によっても異なる

⇒「^{ブージャナ}供養」とは本来ブツや教法、僧伽に対して飲食や灯明、衣服などを奉ることだった

3. 回向の違い

「つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の^{えこう}回向あり。一つには^{おうそう}往相、二つには^{げんそう}還相なり。往相の回向について^{きょうぎょうしんしょう}真実の教行信証あり」(親鸞聖人『教行信証』)

「^{おうげん}往還の回向は他力による。^{しょうじょう}正定の因はただ信心なり」(同上)

⇒「他力念仏の教えを味わうに、二つの回向、すなわち^{おうそう}往相回向と^{げんそう}還相回向がある。往相回向のなかに真実の教行信証がある」。往相回向とはわたしを浄土へ^ゆ往かせるはたらき。還相回向とはわたしを浄土から^{かえ}還ってこさせるはたらき。このふたつが、浄土真宗の回向観です。

⇒自力念仏の回向と区別するため、『他力回向』や『本願力回向』とも読み変えられています。

「如来の回向に^{きにゆう}帰入して^{がんきぶっしん}願作仏心をうるひとは自力の回向をすてはてて^{りやくうじょう}利益有情はきはもなし」(親鸞聖人『正像末和讃』)

4. 自分自身の安心を出発点とする生き方

輪廻転生という考え方も習俗と宗教が複雑に影響しあった考え方ですが、人間だけでない^{うじょう}有情がともに輪廻すると考えるなかに、万物との一体感をともなった深い生命観が秘められていて、大きな生命の連環を教えてください。

⇒「山鳥のほろほろと鳴く声きけば 父かとぞおもふ母かとぞおもふ」(行基)

追善供養は輪廻転生の考え方の上に成り立っています。その輪廻転生の本質は、万物との一体感にあります。一体となった世界、つまり**大いなるいのちそのもの (アミターユス、阿弥陀如来、無量寿、無量光、浄土)**です。それはわたしを中心としない世界です。亡き方は私の手を離れたから阿弥陀さまにお任せしましょうという言い方もできるでしょうが、娑婆のわたしのいのちも本質的に阿弥陀さまにお任せする以外ないのではないのでしょうか。

⇒ヒューマニズム (人間至上主義) の限界を超えていく